



第8012号

2024年2月29日(木)

ウクライナ、国家存亡を賭けた戦い

エコノミスト 西谷 公明

戦争は一度始まると終わることが難しい。正義と現実の間で、私たち自身もまた揺れる。力による国境変更を許してはならないが、最後はリアルな現実が帰趨(きすう)を決めるのが戦争でもある。戦争は不条理であり、かつ冷酷である。

残念ながらウクライナにとり、近い将来のある時点で、ロシアの支配地域を追認する形で停戦に動くのが現実的な選択になりつつあるように思う。

ただし、それを決めるのはウクライナ国民であって、西側ではない。

◆ 侵攻3年目、立ち足はかかる苦境

既に2年間、この国は西側から巨額の資金と膨大な量の兵器の供与を得て、国力をはるかに超えるコストをかけてロシアの侵略に抵抗してきた。だが、戦況はこう着し、ここへきて守勢へ転じている。兵力の損失と疲弊は、私たちが日々のニュースでうかがい知るより、ずっと深刻であるに違いない。たとえ支援が続いても、これから先さらに1年、戦い抜くだけの力をすぐに回復できるのかどうか、定かではない。

対するロシアは、資源大国から軍事大国へと化している。西側が表向きはどうであれ、今やたけだけしい野性を隠さないロシアを前に、自らを危険にさらすような戦争のエスカレーションを望まないことも明らかだ。それにアメリカにとり、大西洋を隔てたウクライナは、ロシアが抱くようなコアなインテレストではないだろう。

◆ はびこる行政の汚職と社会の腐敗

誤解を恐れずに言えば、この度のロシアによるウクライナ侵攻と奪われた領土を取り返すための戦いによって初めて、この国に暮らす人々は、ウクライナ語を話すことの意味に目覚め、ウクライナ国民であることを自覚し、また、国家の危機を自分事として捉えて一つにまとまりつつあるように思われる。だが、それももろいことかもしれない。

この30年、私はこの国の人々の口から、ロシアからの独立や欧州への統合について幾度となく聞かされた。しかし、ロシアから独立し、自由で開かれた公正な社会を目指すためには、まずこの国の社会を厚く幾重にも覆う、古い遺物を剥ぐ必要があるのだが、その解は示されなかった。

改革は滞り、行政の汚職と社会の腐敗がはびこった。欧州連合(EU)や北大西洋条約機構(NATO)への加盟は、依然として蜃気楼(しんきろう)のように見え隠れするだけだ。

◆ 果たして1年後、国の姿は

私は、このまま戦争を続ければ、やがて反転攻勢どころか、ウクライナという国そのものを危うくしかねない事態も起こり得るのではないかと案じている。財政の破綻は、かねて指摘してきた通りである。もはや誰もが勝てないと分かる戦争を、一体何のために続けるのか？ というむなしき疑問が国民の間に広がるとき、最悪の場合、歴史的に非ロシアだった西ウクライナを重心として分裂することもあり得るのではないかと。

ロシアに奪われた領土を取り返すための戦争は、国家の存亡を賭けた戦いのフェーズへ移りつつあるように思う。ウクライナで生きる人々の真の強さが試されるのは、これからである。

(にしたに・ともあき)

◆ 監修 ◆ 内外情勢調査会

◆ 委託編集 ◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111 (代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003